

タイトル 『金の卵の骨』 作 三浦 実夫

登場人物 女2人、男4人

迫 鉄平 レタリングデザイナー  
三谷 竜介 営業マン  
里中 点子 写植オペレーター  
真木 麗子 グラフィックデザイナー  
真木 真介 麗子の父・真木工房社長  
倉科 仁 麗子の叔父・真木工房専務

【プロローグ】 一九九七年（平成九年） 冬

上野駅十八番線ホーム。  
ベンチに腰かけ、落ちつきなく辺りを見回す竜介。その傍らには点子。

点子 キョロキョロしないでよ。  
竜介 ちゃんとこのホームって言ったか。  
点子 しつかり伝えましたよ。（笑いをもらす）  
竜介 何がおかしいんだ。  
点子 何だか思い出しちゃった。三人で東京に出てきたときのこと。ねっ、このホームだったでしょ。  
竜介 ああ、十八番線ホーム…。  
点子 右も左も分らない金の卵たち。列車から降りて、みんなキョロキョロしてたわ。  
竜介 「今日からあなたも東京の人」なんて言われてな。正直、人買いにさらわれてきた気分だったけど。  
点子 私たち、運がよかったのよ、真木工房に拾われて。  
竜介 あそこが俺たちの青春だったからな。  
点子 すっかり街も人も変わってしまったわ。  
竜介 俺たちも「東京の人」ってわけだ。  
点子 あら、あなたは全然変わってないわよ。  
竜介 えっ、そうかあ。  
点子 お人よしの田舎っぺのまんま。

竜介 (ポーズを取って) どこから見だつてステイボーイだべ。  
点子 シティボーイは訛らないの。

竜介 (身震いして) 今夜はやけにすばれるなあ。

点子 八甲田は雪よ、きつと。

竜介 なんだ。おお、さぶい!

竜介、立ち上がったってホームを眺める。

竜介 上野駅か……。鉄平と三人でなあ、しゃっこい風に吹かれてよお。家さけえりてえなんて言つたけなあ。

竜介、『あゝ、上野駅』を口ずさむ。

どこかに故郷の 香りを乗せて  
入る列車の なつかしさ

上野は おいらの心の駅だ  
くじけちゃいけない 人生が

あの日 ここから始まった

【一場】 一九八三年(昭和五十八年) 春

真木工房制作室。

舞台中央にミーティング用テーブル。上手に電話が置かれたデスクが二つ。奥の壁に大きなホワイトボード。その脇の棚にポータブルラジオ。手前に背もたれのある長椅子が一脚置かれている。上手に給湯室や写植室への通路があり、従業員用のロッカーが見える。下手に玄関へ通じるドア。

テーブルに日本酒と洋酒のボトル。コーヒースイフォンが湯気を立てている。

ホワイトボードの レタリング文字 に目を凝らす鉄平。

通路から寿司桶を持った点子が現れる。

点子 ぽーっと突っ立ってないで手伝つてよ。

鉄平 うーん、(通路に向かいながら) 今回はいけると思ったんだけど。

点子 素直に喜ばない、特別賞もらつたんだから。

鉄平の声 石井賞でなきや意味ないんだよ。

点子 賞金で独立しようなんて、そもそも考えが甘いのよ。

鉄平の声　これでまた独立が遠のくなあ。  
点子　そんな邪念で描いたからでしょ。

鉄平、皿とグラスを持って現れ、テーブルに並べる。

その皿につまみを盛りつける点子。

鉄平　賞金獲得したら、点子にもプレゼントあったんだぜ。

点子　あら、指輪の一つも買ってくれたわけ？

鉄平　ダイヤモンドとはいかないけどね。

点子　だったらもつと頑張らなきゃだめじゃないの。

鉄平　まったく女というやつはすぐこれだ。

点子　あつ、女つて言った。男女差別ハンター！

鉄平　あげ足ばっか取りやがって。

玄関口から竜介が現れる。

竜介　いやあ、唇間っからおあついねえ。

鉄平　おい、盗み聞きか。

竜介　外まで筒抜けだよ。(寿司桶を覗き)うほほー、特上とはまた豪勢だ。

点子　社長が奮発してくれたのよ。

竜介　鉄平君、特別賞おめでとございます。

鉄平　竜介が言うど嫌みに聞こえるな。

竜介　あれは審査員の誤審さ。賞金かつさらった作品より迫力あったぜ。なあ？

点子　それは身びいきってもんよ。

鉄平　ああ、上には上がいるってことさ。

竜介　まっ、先は長いんだ。焦ることねえよ。

点子　レタリング命だしね。

竜介　点子命じゃねえのが不満だってか。

点子　デートのときもお店のメニューでレタリングの講義よ。

竜介　文字っこさ焼き餅やいでも仕方ねえべ。

点子　この間なんて映画が始まった途端、会社に飛んで帰っちゃったんだから。

竜介　どうして。

鉄平　ちようどロゴのデザインに悩んでただけどさ。タイトル見た瞬間、閃いたんだ。『ドクトルジバゴ』様々だよ。

竜介　さすがレタリングの鬼…。

点子　私を歌舞伎町にほったらかしてね。頭にきて歌声喫茶で歌いまくったわよ。

鉄平　それ以来、ご機嫌斜めってわけ。

竜介　ローマンタイプの俺と違って、お前はガチガチのゴシック体だからなあ。

点子　同じローマンでも、竜介はイタリック体だけどね。

鉄平　へソ曲がり野郎にはピッタリ。  
竜介　ケツ、小バカにすておもしえぐね。  
点子　すぐにいじける斜体文字。  
竜介　ほつたらごと言つて、鉄平はおめより字っこさ惚れてんだぞ。  
鉄平　まんず文字っこは文句言わね。  
点子　すたらおらはんかわらすだつてすか。  
竜介　だから言つてるべ、鉄平は諦めでおらど付きあえつて  
すかねえごど。なすてそつたら話になるのっしや。  
竜介　文字っこ描き始まつたら、粗末にされるの見えでるべ。  
点子　んだども、竜介の嫁っ子になるのだけは考えられね。  
竜介　めんこく磨いでやるだぞ。  
鉄平　磨き砂でナベのケツ磨ぐみでにが？  
点子　はんかくせ、おらは八甲田の雪解け水で磨いたおなごだ。竜介が磨くのは  
駅前スナックの朱実ちゃんでねの？  
竜介　ああ、愛しの朱実ちゃん。今ごろどうしてっかなあ。  
鉄平　ひじ鉄喰らつたくせに、未練たらしいぞ。  
点子　えつ、また振られたの？  
鉄平　待ち合わせた喫茶店に彼氏が現れてさ、そんときの竜介つたら…。  
竜介　あつ、この野郎。バラしやがつて！（鉄平にヘッドロックをかける）  
鉄平　何だよ、こら、やめる。  
点子　いい加減にして！（給湯室へ去る）  
竜介　糞つたれが！（鉄平を思いつき突き放す）

鉄平が机にぶつかった拍子に、原稿や本が床に散らばる。

鉄平　ああ、いてえ。（散らばつたものを拾いながら）バカ力出しやがつて。  
竜介　つまんねえこと言っからだよ。  
鉄平　あつ、これ…。（本を竜介に手渡す）  
竜介　もう読んだのか。  
鉄平　何だか身につまされちまつたよ、同じ金の卵として。  
竜介　俺は途中で投げ出しちゃつたけど。自分が犯した罪を社会のせいにして  
がつてさ。  
鉄平　いいじゃないか。やっと生きる希望を見つけたんだ。  
点子の声　ねえ、永山則夫の話？　読んだわよ、『人民を忘れたカナリヤたち』。  
竜介　思想家どりで鼻持ちならねえだろ。  
点子の声　そう言っちゃかわいそうよ。

点子、持ってきたカップにサイフォンのコーヒーを注ぐ。

竜介　何だい、人殺しは絶対だめって批判してたくせに。

点子 気になるじゃない、どんなこと考えているのか。同郷の集団就職組なんだから。

竜介 おかげでこっちまで肩身が狭えや。

点子 まさかマルクス主義に目覚めるとは思わなかったけど。

竜介 共産党にでも入れてもらおう気かね。

点子 願い下げでしょ、さすがの共産党も。(コーヒーを配る)

鉄平 おっ、いい香り。あちーっ。(コーヒーを本にこぼす)

点子 何やってんの！

鉄平 熱すぎるよ。あーあ、滲みちゃった…。

竜介 いいよ。どうせ読まねえから。

鉄平 (ページをめくり) そんなこと言わないで読んでやれよ。親にも世間にも捨てられて、中学も満足に行つてないんだ。心も曲がりやグレもするさ。

竜介 バカ言つな。中卒の人間なんて五万といるんだぜ。いちいち同情してられるか。

鉄平 せめてもう少し早くマルクスと出会つてりゃあな。

竜介 なまじの思想はもつと危険さ。あの野郎のことだ。大方、三里塚でゲバ棒

振るうか、浅間山荘で銃撃戦でもやってたね。

点子 やつと人間性に目覚めたのよ。もうちよつと温かく見守つてあげても…。

竜介 冗談じゃねえ。あんな人殺しといつしよにされてたまるか。

鉄平 トゲのある言い方しやがって。ヘソ曲がり野郎の悪いクセだ。

竜介 親の因果が子に報いつてね。ヘソ曲がりはお互い様。

倉科の声 今日の一仕事はつらかったー。

ギターを抱えた倉科が通路から現れる。

点子 どうしたんです、そのギター。

鉄平 ずいぶん年代物のようですが…。

倉科 学生時代に買った質流れのオンボロ。フォークの一曲も披露しようかと思つてさ。

点子 専務は本当に趣味が広いのねえ。

倉科 時代の流行を体験するのがモットーなんで…。

竜介 ケツ、単なる流行の追っかけ…。

真木 (通路から現れ) 待たせたね。

真木、ホワイトボードの レタリング文字 に目をとめる。

真木 もつわしの教えることはなさそうだな。

鉄平 (真木の隣に並び) いえ、まだまだ遠いようです、石井賞は。

真木 技術は鉄平が勝つてたんだが…。

鉄平 さすが美大出身だけあって、センスは抜群でした。

真木

この業界は学歴じゃない。実力がすべてだ。

鉄平

ええ、証明したかったんですけどね、中卒でも勝負できるって。

真木

わしがこの道に入ったところは、筆など握らせてもらえなかったものさ。「仕事は見て覚える、技術は盗め」って言われて…。

竜介

初耳ですね、身の上話…。

真木

師匠や兄弟子が帰った後に、やっと見よう見まねの修行だ。独立といってもバラツクのような事務所でな。食い扶持は親父のニコヨンに頼りっきりだった。

竜介

へえー、社長にもそんな辛い時代が…。

点子

ニコヨンって？

竜介

ほら、丸山明宏の『ヨイトマケの歌』…。

点子

ああ、日雇い労働者…。

真木

石井賞の彼も三回目の挑戦だそうじゃないか。この道で申し上がるには腕を磨き続けるしかないんだよ。

鉄平

はい。

竜介

専務、そろそろ乾杯といきましょう。

倉科

もう少し待って。麗ちゃんが帰ってくるんだよ、ロスから。

竜介

えつ、あのじゃじゃ馬が。

真木

飯にもわしの娘なんだが。

竜介

あつ、すいません。

鉄平

楽しみですね、どんな土産を持ってくるか。

倉科

わが社にもアメリカ資本主義の風が吹くだろうね。

点子

麗子さん、ここで働くんですか…。

倉科

もちろんだよ。即戦力なんだから。

竜介

話は後にして早く乾杯、乾杯…。

鉄平

何ガツガツしてるんだ。

竜介

わざわざ昼飯抜いたんだぜ。

真木

倉科君、始めちまおう。社員を飢え死にさせるわけにいかんだろ。

竜介

そこなくっちゃ。(ビールの栓を威勢よく抜く)

そこへ麗子が大きな旅行バッグを引いて現れる。

麗子

Hello, How are you? (敬礼して) 真木麗子、ただいま帰還しました。

真木

(満面の笑みで答礼して) うむ、ご苦労。

竜介

すっかりアカ抜けちゃって、ハリウッドの女優かと思っただぜ。

麗子

うーん、懐かしい現像液の匂い。ほっとする。(ホワイトボードのレタリングに気づき) あら、鉄平さんのレタリングってこれ？

鉄平

どう、感想は？

竜介

そんなのは後、後…。(ビールを注いで回す)

倉科

社長、乾杯の音頭を…。

真木

えー、活版印刷が廃れて、今や平版印刷全盛時代。広告・出版界においては、デザイン文字に注目が集まっている。そんな中であって、鉄平がレタリングのコンクールで特別賞を獲得したことは、わが工房にとっても実に喜ばしい…。

鉄平

社長が育ててくださったおかげです。

真木

近ごろは刺激的なサイケ調の文字を見かけるが、書体の基本はあくまでも明朝とゴシック。この基本を外れてはレタリングにならない。鉄平には、今回の賞に満足することなく、さらに精進して上をめざしてほしい。(胸のポケットから祝儀袋を出し) ささやかだが、わしからの祝いだ。

鉄平

ありがとうございます。

竜介

すげえ、金一封だぜ。

点子

今夜は歌舞伎町ね。

真木

はしゃぐほどの中身じゃないぞ。さっ、ビールにボウフラ湧くんじゃないかね。

倉科

これは一本取られました。

真木

では、乾杯！

全員

カンパイ。

鉄平と竜介、先を争って寿司を頼ばる。

倉科

まるで早食い競争だね。

麗子

(一気に飲んで) うーん、good! やっぱり日本のビールは美味しい。

点子

さあ、あたしもいただくわよ。

倉科

こちらは美女の飲み比べ？

麗子

注いでいただけます？

倉科

(ビールを注ぎながら) 救急車騒ぎなんてのは勘弁してよ。

麗子

あら、何のことかしら？

点子

卒業祝いの急性アルコール中毒…。

麗子

伊達に年はとってませんので…。

点子

口スの大男相手に鍛えてきたってわけだ。

倉科

(酒を注ぎ) みんな遅くなりましたね。

真木

君の厳しい指導のたまものだよ。

倉科

これからが楽しみです。

真木

まあ、飲みたまえ。(酒を注ぐ)

点子

麗子さん、研修はどうでした。

麗子

何と言ってもコンピューターグラフィックね、一番の収穫は。ランドーは最先端技術に敏感な企業ですから。

点子

えっ、コンピューター？

鉄平

ロボットがデザインするとか？

麗子

違っわよ。

鉄平 じゃあどうやって…。  
麗子 デザインのデータをパソコンに入力して…。  
点子 ちよつと待って。私たちにコンピュータの話されても…。『未知との遭遇』にも引っくり返ったんだから。  
麗子 Seeing is believing…百聞は一見にしかず。近いうちにお目にかけるわ。  
鉄平 じゃあ先に俺のレタリング見てくれるかな。

ホワイトボードを囲む鉄平と麗子、そして二人の背後に点子。  
竜介、寿司に夢中の様子。  
倉科、ポロロンとギターのコードを合わせる。  
満足げに杯を傾ける真木。

麗子 技術は申し分ないんだけど、ちよつとアンティークな印象なのよね。  
鉄平 えっ、古くさいってこと？  
麗子 例えば「の」の字…右下へ流れるアールが重い気がする。  
鉄平 そつ言われてみると…。  
点子 でもこの書体の持ち味は安定感だから。  
麗子 保守的な発想だわ。  
点子 えっ…。  
麗子 他の書体との組み合わせは想定してます？ 例えば平体とか長体とか、斜体でもいいんですが…。  
鉄平 いや、そこまでは…。  
麗子 どうしてもシャープさに欠けちゃうのよ。致命傷ね。  
点子 いくら何でも致命傷はないんじゃない。  
鉄平 いいんだよ、厳しい意見がほしかったんだから。  
点子 鉄平がいいなら文句ないけど。

点子、その場を離れて、手酌で飲む真木に酒を注ぐ。

真木 やぁ、ありがとう。  
点子 社長も一安心ですね、麗子さんがお帰りになって。  
真木 そばにいたらいたで煩わしいんだけどな。まだいけるだろ、点ちゃんもはい、いただきます。  
真木 (点子にビールを注ぎ) 頑張ってくれてるようだね。  
点子 いえ、そんな…。  
倉科 (ギターを爪弾き) 今日のー。  
真木 (倉科にビールを注ぎ) 君の唄を聞くのも久し振りだね。  
倉科 ギターも喉もすっかり錆びついてるみたいで…。  
竜介 あぁ、食った食った。  
点子 すこい食べっぶりね。



竜介 そつちもやけにハイピッチじゃねえか。じゃじゃ馬が気になるのか。別に…。

竜介 実際、美人になったよな。どう見たって立派なディレクター振りですよ。うるさい。あっち行って！

竜介 ほんとにしとけよ、歌舞伎町練り出すんだから。(鉄平のそばへ)  
企業のロゴ・マークは会社の顔よ。印象が弱ければ社名も定着しないわ。パッケージロゴもいっしょ。いかに消費者の手に取らせるかが勝負。このレタリングが一番になれなかったのは、そこが甘いからよ。  
鉄平 うーん、なるほど…。

竜介 おいおい、プロにずいぶんな言い方じゃねえか。

麗子 作品の批評にプロもアマもありません。次のステップへのアドバイス。いや、それにしただって…。

鉄平 いいんだよ。実際、新しいアイデアが浮かびそうなんだ。

竜介 アメリカ帰りがそんなに偉いのかね。

麗子 (旅行カバンを掴み) 長旅で疲れちゃた。お先に失礼するわ。

鉄平 あっ、ちょっと、まだ…。

麗子 みなさんごゆっくり。Good-by…。

麗子、通路へ去る。

何となく白けた空気が漂う。

鉄平 怒らせちゃいましたね。

真木 まったく、何を修行してきたんだか。

倉科 まあ、みんな飲んで飲んで。(ボロロンとギターを鳴らし) 一曲ご披露させてもらいますよー。  
点子 待つてましたあ。

倉科が歌う『三谷ブルース』に、一同、手拍子をとる。

今日の仕事はつらかった

あとは焼酎をあおるだけ

鉄平 さすが昔取った杵柄、聞かせますね。

倉科 ついでにもう一つ披露しないと…。

点子 新曲ですか。

倉科 いやいや、この間、会合でいい話があつてね。

竜介 業界ぐるみで給料上げてくれるとか。

点子 ケチな専務に期待するだけ無駄よ。

倉科 優秀なスタッフが揃ってるって、同業者から。やつかみ半分だったけど…。

竜介 そりゃそうですよ。安い賃金で働いてるんですから。

倉科

身も蓋もない言い方だねえ。

竜介

今日のー 仕事はつらかったー。

真木

特に写植のツメ文字がいつて評判だったな。

点子

(疑わしげに) 本当ですかあ。

倉科

点ちゃんの技術にはスキがないからね。

真木

質問攻めにあつて閉口したよ。もうちょっと勉強せんな。折角、優秀な

竜介

スタッフがいるんだから。

点子

ほら、出番だぞ。

竜介

私が?(酔っている様子)

点子

お前しかいねえだろ。点数を稼ぐいいチャンスだ。

竜介

では、写植のツメ打ちについてご説明申し上げます。仮名は漢字より造りが小さいですから、どうしても文字間にバラつきができて、アルファベッ

点子

トみたいにラインが綺麗に揃わないんです。

鉄平

ツメ打ちができる前は、残業と言えばツメ張りだったな。

点子

そこでオペレーター仲間が試行錯誤を重ねましてね。一文字一文字、組み合わせの歯送りを計算したんです。「あ」と「い」は一歯送り、「い」と

点子

「う」は二歯送りというように。そうしてようやく完成させたんですよ、

竜介

ツメ打ちの方法を…。

鉄平

あの頃は夜中までガチャガチャやってたっけ、オペレーターの連中…。

点子

ツメ打ちが完成したときは、みんな拍手喝采したもんさ。

真木

そりゃ血が滲む思いでやってんだから。オペレーター泣かせよ。生原稿の

点子

歯送りを計算して、それから試し打ちに本番の打ち込みなんて。ベタ打ち

真木

の三倍も手間がかかるんだもの。

倉科

こりゃ足を向けて寝られんな。

点子

写植の醍醐味はツメ打ちにありつてね。エへへ、言っちゃった。

倉科

写植を強化しないとイケませんね。

点子

(立ち上がり) 早く手を打たないと他社に遅れをとりますよ。

真木

点子、怪しい足取りで通路へ去る。

鉄平

おいおい、大丈夫か。

真木

いい話だ。仲間にも教えてやらんな。

竜介

それはちょっと待ってください。

真木

何でだね。

竜介

うちは今、Aランクをキープしてるんです、大日本出版に出入りする業者

倉科

の中で。鉄平のレタリングと点子の写植のおかげなんですよ。何も競争相

真木

手に塩を送ることありませんよ。

点子

これは竜二に一本とられたな。

倉科

嬉しいじゃありませんか、みんな一人前になって。

竜介

口先だけじゃなくてえ。

倉科

口先だけじゃなくてえ。

竜介

口先だけじゃなくてえ。

倉科

口先だけじゃなくてえ。

竜介

口先だけじゃなくてえ。

倉科 (腕時計を見て) あっ、そろそろ出かけませんと…。  
倉科 ケツ、都合悪くなるとすぐこれだ。  
倉科 今期は儲けが出たからね。税理士と節税の相談なんだよ。  
倉科 儲けた分は脱税ってわけですか。  
真木 わしが考えてないけども？  
倉科 夏のボーナスは期待してちょうだい。  
鉄平 えっ、本当ですか。  
倉科 それでこそ働きがいがあるってもんだ。  
真木 倉科くん、遅れるぞ。  
倉科 はいはい、盛り上がってね。

真木と倉科、玄関口から出ていく。

鉄平 この野郎、人を出しにしゃがって…。  
倉科 俺のおかげだぜ、ボーナスは。さてと、飲み直しますか。(ビールを注ぐ)  
鉄平 おっ、これからが本番よ。  
倉科 改めておめでとう。  
鉄平 ありがとう。

点子、こめかみを押さえて戻ってくる。

点子 頭が痛い…。  
倉科 無茶するからだよ。  
鉄平 迎え酒といくか。  
点子 水ちょうだい。  
倉科 へいへい。(氷水を注いで点子へ)  
鉄平 少し横になつてろよ。  
倉科 ご機嫌斜めなんだろ。  
鉄平 どうして。  
倉科 おめえが麗ちゃんとデレデレやってるからじゃねえか。  
鉄平 はあ？  
倉科 「鉄平さん、鉄平さん」って無邪気だった小娘が、すっかりいい女になつて帰ってきた。そこへ「俺のレタリング見てくれるかな」なんて鼻の下を伸ばしてよ。なあ？  
鉄平 批評を聞いただけだぜ。  
倉科 それがいけねえつつうの。女心を知らねえやつだな。  
鉄平 倉科に言われたくないね。  
点子 黙って聞いている鉄平に腹が立つのよ。  
鉄平 こっちから聞いたって反論できねえだろ。  
点子 職人として悔しくないわけ？

鉄平 かえってサツパリしたよ。

竜介 おいおい、独立資金どうすんだい。

点子 お金が貯まらないのは飲み歩いてるからじゃない。賞金で穴埋めなんて不真面目よ。

竜介 そつできりゃ一石二鳥さ。

点子 捕らぬ狸の皮算用。

竜介 早く故郷に錦飾りてえんだよ。独立できるんなら背に腹は替えられるか。気持ちを入れ替えてコツコツ貯めるしかねえな。

鉄平 そう、それが一番。

点子 カツカツの安月給でどうすりゃ貯まるんだ。

竜介 私は貯めてますよ。竜介より少ない給料でね。

点子 (デスクから通帳を出し) ただいまの残高一三五四円。

竜介 もつ、現実性というものがなさすぎる。

点子 営業は何かと金がかつてさ、今月もスカンピン。(手を差し出し) 少しでもいいから貸してくれない？

点子 (その手をパチンと打ち) だーめっ！

竜介 いてっ、同志愛に欠けるなあ。

点子 給料が足りないってんなら、賃上げ要求して団体交渉する。それなら地域労組の仲間を呼んで手伝ってもらおうよ。

鉄平 こんなちっぼけな会社で赤旗振つてどうすんだ。

点子 独立資金がほしいんでしょ？

竜介 労組だか民青だか知らねえが、最近の流儀は感心しねえな。何でもかんでもおねだりしやがってさ。

点子 まつたく、労働者としての権利意識が薄いんだから。

鉄平 まともに残業代払ってたら、この辺の町工場はみんな倒産だよ。

点子 へえー、残業代も払わない会社つくるんなら一緒にやるのは考えもんね。

竜介 分かった、分かった。とりあえず歌舞伎町に繰り出そうぜ。

点子 ほら、すぐそうやって逃げる。

竜介 面倒くせえ話は後回し。パァッといこう、パァッと…。

鉄平 オールナイトに夜明けのコーヒー。

点子 どうせまた高倉健のヤクザ映画でしょよ。

鉄平 健さんは健さんでも、今夜は『ジャコ万と鉄』。

竜介 涙子ヨチヨ切れの感動もんさ。

点子 またおいてけぼり？

鉄平 しつかりエスコートするって。

点子 歌声喫茶に引つ張つてくからね、看板ばかり眺めてたら…。

竜介 むくれなさんな。今日は金一封があるんだ。

鉄平 おい、これは俺の…。

竜介 独立を目指す同志だろ。小さいことは気にしない。

鉄平 同志だからこそ飲み代は割り勘で…。

点子 (男たちの背を押して) はいはい、はい。

意気揚々と玄関口から出ていく三人。

【二場】一九八五年(昭和六十年) 秋

テーブルにリンゴマークの大きなダンボール箱が二つ。

鉄平、デスクで原稿の整理をしている。

通路から点子が現れる。

点子 あっ、これね、麗子さんが取り寄せたコンピューターって。

鉄平 邪魔くさくってかなわんよ。

点子 楽しみじゃない。

鉄平 このクソ忙しいのに…。

点子 はいはい、急ぎの原稿でしょ。

鉄平 これがレイアウト。全十五段と半五段の新聞広告。

点子 あら、ホンダシビック。

鉄平 こっちが文字原稿だ。

点子 このポリウムで箱打ちなの？

鉄平 一字のハミ出しも許さない左右合わせ。

点子 面倒な注文ね。

鉄平 腕の見せどころじゃねえか。いつまでに打ち上がる？

点子 おだてても今日中には無理よ。早くて…明日の三時ってとこね。

鉄平 ギリギリだなあ。

玄関口から茶封筒を抱えた竜介が現れる。

竜介 おっ、リンゴ？ 田舎から送ってきたのか。

点子 麗子さんよ。

竜介 ははあ、マッキントッシュだな。

鉄平 知ってるのか。

竜介 何度か得意先で見たことあるんだ。(茶封筒を鉄平に預けて) どれどれ。

鉄平 おい。

竜介 ちょっと覗いてみるだけさ。(ガムテープを剥がす)

鉄平と点子、竜介の背後から覗く。

竜介 やっぱりな。

点子 テレビみたいね。

鉄平 こんなもんで何するんだ。

竜介 さあ、見たことねえから、使ってるところは。みんなカバーをかけてほっ

点子 たらかしさ。  
宝の持ち腐れね。

鉄平 (茶封筒に目をとめ) あれ、新規の原稿じゃないだろうな。

竜介 実はその…。

点子 またー。

竜介 しかも百ページの大物…。

点子 もうパンク寸前なんだから。外注に回してちょうだい。

竜介 そうできりゃあ苦勞しねえよ。

点子 これ以上、仕事入れたら病人が出るわ。

竜介 写植は点子、版下は鉄平につて直々のご指名で…。

点子 そんな請け方してたら、独立したときてんてこ舞いよ。

竜介 それはそれ、これはこれさ。担当者に頭下げられてみな。

点子 どうせ安請け合いましたんでしょ、いつもの調子で「ハイハイ」つて。

竜介 今の俺の仕事が何か知ってるか。得意先に「できません」つて詫び入れることだぜ。

点子 後先考えないで安易に請けるからじゃない。誰が何と言おうと無理なもんは無理！

鉄平 請けた仕事をつ返すわけにもいかんだろう。

点子 仕方ないじゃない。

鉄平 この仕事は信用が第一、断ったらそれこそ独立にけちがつくさ。

点子 もう、竜介には甘いんだから。

竜介 代わりに時間はたつぶりもらうから。なつ、頼むよ。今月はこれで打ち止め。そうだ、原稿、整理しないと…。(デスクで原稿の整理を始める)

点子 どうなったつて知らないからね。

鉄平 ほら、こつちの打ち合わせも終わつてないぞ。

点子 (不満そうに) はいはい。

鉄平と点子、打ち合わせに戻る。

竜介 永山のやつ、結婚したな。

鉄平 えっ、釈放されたのか。

竜介 獄中結婚だったさ。

点子 お相手は？

竜介 何でも永山の書いた本に痺れて、アメリカの生活を捨ててきたらしい。

点子 アメリカからわざわざ…ずいぶん情熱的な人ね。

鉄平 どうしてまた永山は…。

鉄平 裁判が有利になるとかつて、支援グループや弁護団に唆されたんだろ。

点子 手段じゃ結婚しないわよ。

鉄平 えっ…。

鉄平

竜介 (ペンを放り) あゝあ、眠くって集中できねえ。  
鉄平 不死身の営業部長殿もネジ切れか。  
竜介 点子、コーヒー入れてくれよ。  
点子 自業自得。飲みたきゃご自由に。  
竜介 純喫茶「点子」のコーヒーじゃないと…。  
点子 いいこと言ってる。  
鉄平 悪いけど俺も…。くたびれちまったよ。昨日も徹夜だったからさ。  
点子 もつ、高いわよ!

点子が給湯室へ去ったと見るや、鉄平の脇に擦り寄る竜介。

竜介 (声を潜め) おい、お前らはどうなってんだ。  
鉄平 何の話だよ。  
竜介 (給湯室の方を窺いつつ) 点子も夏には二十五だぞ。  
鉄平 お互い様さ。  
竜介 同じ二十五でも、男と女じゃ違うんだよ。  
点子の声 ねえ、ブラックでいい？  
竜介 ああ、うんと苦いやつ…。いずれにしろ長すぎる春ってのはよくねえ。  
鉄平 何か頼まれたのか。  
竜介 人にも頼むような玉じゃねえだろ。  
鉄平 じゃあ何でお前が気にするんだ。  
竜介 本当に結婚する気あんのか。  
鉄平 決まってるだろう。

点子、コーヒーカップを手に戻ってくる。

点子 (コーヒーを配りながら) 何よ、こそこそ話して。  
竜介 おつ、いい香り。  
点子 ぜーんぶ聞こえたわよ。  
竜介 えつ、そんな話がはえや。  
点子 関係ないじゃない。  
竜介 大いにあるさ。いっしょに会社興そうって仲間だぜ。フラフラされてちゃ  
かなわんよ。  
点子 心配してくれるのは嬉しいけど、これは私と鉄平の問題だから。  
鉄平 そもそも独立が遅れたのは誰のせいだと思ってるんだ。  
竜介 な、何だよ。  
鉄平 お前が女に持ち逃げされたからだろ、汗水流して貯めた百万円。  
竜介 朱美ちゃんは帰ってくるって…。  
鉄平 おめでたいやつだ。金、巻き上げてとんずらした女が戻ってくるわけない  
だろう。

竜介 そんな言い方ねえだろ。

点子 はいはい、そこまでにして。

鉄平 今はとにかく独立が先だよ。

竜介 だったら早く社長に談判しようぜ。公的融資で資金の見通しも立ったんだしさ。

鉄平 何をそんなに焦ってるんだ。

竜介 後手後手で、いつまでたっても目鼻がつかねえからよ。

点子 ああ、もう仕方ない！

点子、通路へ引っ込み、ロッカーを開ける。

竜介 何も怒るこたあねえだろ。

鉄平 また誓約書、書かされんじやないのか、もう喧嘩しませんって。これで何枚目だよ。

点子 (戻ってきて) 浮かれないって約束してちょうだい。よく分かんねえけど、点子が言っんなら…。

点子 実はね、もう独立の了解とってるのよ、社長から。

竜介 えっ、嘘…。

鉄平 冗談…。

点子 嘘でも冗談でもないの。ほら…。(書類を見せる)

竜介 おおっ、社長のサインとハンコだぜ。

鉄平 本当だ。

点子 連帯保証人も引き受けてくれるって。これで写植機も買えるし、事務所だつて…。

鉄平 何で今まで黙ってたんだ。

点子 どうせ浮かれるに決まってるじゃない。それじゃあ困るのよ、この忙しいときに。だからしばらく黙っててくれて、社長が…。

鉄平 いよいよ念願の独立かあ。

竜介 ああ、独立だ。独立できるぞ。バンザイ！

鉄平と竜介、抱き合って喜び、書類を散らかす。

点子 ほら、言ったそばから…。

竜介 こりゃ社長は点子で決まりだな。

鉄平 しつかり者の女社長、よろしくお願いします。

点子 私は真つ平だから、不良社員の面倒見るなんて。

竜介 ああ、はえとこ稼ぎまくって、東北道をオープンカーでぶっ飛ばしてよあ、村に錦を飾りてえなあ。

「幸せー それともーいまは不幸せー」と口ずさみながら倉科が現れる。



耳にはウォークマン、手にはユニケル黄帝液。

倉科

おはよう、諸君！

竜介

おおっ、ウォークマン。

点子

大丈夫なのかしら、耳元であんな…。

鉄平

格好つけてんだよ。

倉科

(ウォークマンを外して)何か言った。

鉄平

いや、専務のセンスはすごいなって。

倉科

私のハッピーは時代の先端をいくことだからね。

竜介

ちよこつと拝借…。(ウォークマンを耳に当て)うほほー、はるみちゃん

倉科

の『ふたりの大阪』だぜ。(鼻歌交じりに歩き回る)

鉄平

(ユニケル黄帝液を渡し)はい、これでも飲んで頑張って。

倉科

あつ、ユニケル。

点子

鉄平がデザインしたパッケージじゃない。

倉科

今やどこもかしこも残業残業だからね。日本経済を陰で支えるヒット商品。

点子

怪しい色してる。

鉄平

試供品飲んだんだけど、これが結構効くんだな。

点子

体に毒だわ、そのままですて働くなんて。

倉科

あつちの方にも効果抜群なんだとか。

点子

(倉科を睨み)セクシャルハラスメントっていうんですよ、そういうの。

倉科

えつ、セクシャル…。

点子

専務ならご存知でしょうけどね。時代の先端をいつてらっしゃいますから。

倉科

外国じゃ犯罪になるんです。

鉄平

いや、あの、聞きましたよ、独立の話。

倉科

さすが専務の地獄耳。

鉄平

悪いんだが、もうしばらく待ってくれないかな。

倉科

そんな…。

点子

社長はOKしてくれましたけど…。

倉科

情にほだされたんだろ。先々のことも考えないで…。

点子

もう動き出してるんですよ。この期に及んで待ってくれなかったって…。

倉科

今は投資で儲ける時代だよ。何も進んで苦労しなくてもいいだろ。メリツ

トなんてないでしょう。

鉄平

金儲けだけが目的じゃありませんから。

点子

仕事は外注に回せば何とかになりますしね。

倉科

給料、大幅アップしてもいいんだけど。ねっ、考え直してよ。

鉄平

夢ですから。

倉科

夢？

点子

ええ、わたしたちが東京に出てきたときからの。

倉科

夢って言われちゃうとなあ。

竜介

(ヘッドホンを外して)ああ、難聴になりそう。よくこんな高いもん買え

ましたね。

倉科 ちよっと株で儲かったんだ。

竜介 専務、株やってるんですか。

倉科 いい小遣い稼ぎになるからね。

竜介 なるほど、株が。

点子 竜介、変な考え、起こさないでよ。

竜介 わ、分かってるって。

倉科 確かにリスクがないとは言わないけど、株のイロ八ぐらい知つとかないと

さ。会社、興そうつてんなら尚更。時代の流れも把握できるしね。どう？ 試

しに投資してみたら？ 独立資金の一部でさ。

マネーゲームに参加する気はありません。

点子

通路から麗子が現れる。

麗子 あら、届いたのね。何で開いてるの。

竜介 さあて、仕事仕事っと。

麗子 いじつてないでしょうね。

竜介 ちよこつと覗いただけ。

麗子 鉄平さん、手伝ってちょうだい。

鉄平 おっ、どうすりゃいい？

点子 (鉄平に) 打ち合わせの途中よ。ほら、向こうのデスク。

鉄平と点子、打ち合わせに戻る。

倉科 どれどれ…。(麗子を手伝つ)

麗子 竜介さん、延長コードありません？

竜介 あつたかなあ。(引き出しの中を探す)

倉科 なかなか丈夫な梱包だね。

竜介 延長コード、延長コード…。

倉科 ビニールカバーも？

麗子 ええ、発泡スチロールも外してください。

竜介 ケツ、ありやがったよ。ねえ、これどうすんの。

麗子 電源にセットして、そのアダプターにつないでちょうだい。

人使いのあれえこと。

麗子 ついでに空き箱も片つけて。

竜介 Oh- No!

竜介、配線を終えると、空箱を通路に片づける。

電話が鳴る。

点子 (受話器を取り) はい、真木工房でございます。  
麗子 これでよしと…。(コンピュータの電源を入れる)  
点子 あっ、いつもお世話になっております。ええ、少しお待ちください。  
麗子 (キーボードを叩き) すぐですから。  
点子 (受話器を手で押さえ) 川瀬オフィスの谷さんからよ。  
竜介 (通路から戻ってきて) いけねえ、ユニケルのチラシ上がってるか。  
鉄平 机の横にある茶封筒…。  
竜介 (電話に出て) はい、お待たせしました。ええ、上がってます。はい、三時ですね。はい、お伺します。(電話を切り) あららっ、ギリギリ…。  
あっ!

竜介、配線コードに足を取られて転倒。  
弾みで版下が床に散らばる。

竜介 い、いてえ!  
点子 何やってるの!  
鉄平 (血相変えて版下を拾い集め) おい、大丈夫か。  
竜介 何だよ、人より版下の心配か。

竜介、足下をふらつかせ、思わずコンピュータに手をつく。

麗子 ちょっと、気をつけてよ!  
竜介 こっちはコンピュータかよ。  
鉄平 汚れてないか。  
点子 うん、大丈夫みたい。  
麗子 やっぱり紙の版下は危ないわね。  
鉄平 えっ、どういうこと…。  
麗子 そろそろ潮時かしら。  
倉科 例の話かい?  
麗子 ええ。  
倉科 まだ早いだろ。  
鉄平 何…。  
麗子 実はコンピュータ制作を導入しようかって…。  
竜介 コンピューター?  
麗子 紙は汚れたり、破れたりするでしょ。その点、マックは安心よ。おまけにロゴの描き起こしから文章の打ち込み、版下の管理までできるしね。  
鉄平 (笑って) まさか…。  
倉科 そのまさかなんだよ。話を聞いて私もびっくりしたんだけど。  
点子 写植もいらなくなるってこと?  
麗子 (フロップピーを出し) 論より証拠。ご覧になります?。

鉄平 ドラえもんじゃあるまいし、そんなおもちゃに興味ないね。(デスクに戻って原稿の整理をする)

麗子、マックにフロッピーを挿入。キーボードを操作する。  
モニターを覗く点子と竜介。

鉄平 打ち合わせは？

点子 ちよっと待って。

鉄平 何だよ、時間ないんだろう。

竜介 おっ、出てきたぜ。

点子 カラーコピーよ。色もしっかり出てる。

竜介 (手に取り)こりやすげえや。

点子 まるで手品みたい。一体どうなってるの。

麗子 モニターで制作したデザインをプリンターで印刷したのよ。

竜介 おい、鉄平。

鉄平 忙しいんだ。そんなもんと遊んでる暇ないね。

竜介 (プリントを突きつけ)いいから見ってみるよ。

鉄平 (プリントを凝視して)……。

点子 この先、どうなっちゃうのかしら……。

麗子 まだいろいろ課題があるのよ。でもそれがクリアされれば印刷業界全体が変わる。

倉科 コンピューターの進化は日進月歩だからね。

麗子 多分、今の制作スタイルも通用しなくなるわ。

点子 何年くらいで……。

麗子 私には何とも。写植メーカーが特許を盾に和文書体を手放さないから。

倉科 彼らにしてみりゃマックは侵略者だ。命綱の書体をおいそれと譲りゃしないさ。新たに開発するとなれば、早くても三、四年はかかるだろう。

竜介 手仕事の命運もそこまですることか。

麗子 ランドー本社は全面的にマックに切り替えたそうよ。

竜介 デザイナー連中はどうしてんだ。

麗子 遊び感覚でマックを使いこなしてるって。手仕事のメーカーはどんどん潰れてるらしいわ。

倉科 いずれ日本も……。

麗子 悲観しないでください。可能性のほうがるかに大きいんですから。インターネットでやりとりできるんですよ、受注から納品まで。すごいじゃないませんか。

竜介 インターネット？

麗子 簡単に言うと、電話回線を使って、どこにでもデータを送れるのよ。印刷所に送信するだけで入校がOKってわけ。

点子 想像もつかない話ね。

竜介 営業マンもお払い箱ってことか。こりゃ黒船以来の一大事だぜ。

倉科 職人の手仕事からの大転換、産業革命そのものよ。

鉄平 アメリカじゃどうか知らないが、日本では根づきやしないさ。

竜介 だつてお前、現にこうして…。

鉄平 この業界は職人の分業で成り立ってるんだ、かわら版の時代からずっと…。  
その分業システムに膨大な時間とコストがかかるから、コンピューター制  
作が開発されたのよ。

鉄平 コンピューターが描いたレタリングなんて、仏つくつて魂入れずつてやつ  
さ。それともコンピューターが人間を超えるともいうのか。

麗子 ええ、コンピューター・システムが確立されれば、世界を相手に仕事ので  
きるのよ。素晴らしい時代だと思わない？

鉄平 まっ、お手並み拝見させてもらいますよ。

麗子 この波は黙っていれば去るようなものじゃないの。(キーボードを操作し  
てフロッピーを取り出し) 大手代理店や印刷会社に先手打たれたら、うち  
みたいな弱小のプロダクションは生き残れないのよ。(コンピューターの  
電源を落とす)

倉科 まあ、まだ導入すると決まったわけじゃないから。

麗子 導入するしないの問題じゃありません。いつ導入するかなんです。

麗子、通路へ去る。

点子 専務は前向きに…。

倉科 少なくとも無視するわけにはいかないね。

電話が鳴る。

竜介 いつけねえ。もう出たと言ってくれ。

点子 (受話器を取り) はい、真木工房です。(竜介を手で急かし) ええ、間も  
なく着くころかと思いますが。はい、よろしく願います。

竜介 (小声で) 行ってきまゝす。

玄関から飛び出していく竜介。

点子 (受話器を置き) とんでもない時代が来そうね。

鉄平 冗談じゃないよ。

点子 独立どうなるのかしら。

倉科 ゆっくり考えるといいさ。

倉科、通路に去る。

鉄平 (プリントを見つめて) クソつたれが…。  
点子 まだ先のことよ。  
鉄平 遅かれ早かれ、手仕事は息の根を止められるんだ。  
点子 そうなる前にコンピューターを取り込めば…。  
鉄平 (マウスを掴み) こんなもんでレタリングを描けっていつのか。  
点子 写植だってなくなるのよ。  
鉄平 それでよく平気でいられるな。  
点子 平気なわけではないでしょ。でも写植の技術が活かせるかもしれないじゃない。  
鉄平 そんな器用なことができるわけねえだろ。  
点子 写植機だってコンピューターだって人間がつくった道具よ。何とかなるわ。  
鉄平 真つ白な紙に筆や烏口で墨入れしてこそ生きたレタリングさ。こんなもんでつくったレタリングに何の価値があるんだ。  
点子 能書き垂れるのはコンピューター使いこなしてからにして。  
鉄平 とにかく独立の件はおあずけだな。(点子に書類を返す)  
点子 こんなことで諦めるの？  
鉄平 しょうがねえだろつ。

気まずい沈黙。

点子 ねえ、結婚しよ。  
鉄平 何だよ、急に…。  
点子 ずっと待ってた。正直言って、今は独立より二人で新しい生活を始めたい。  
鉄平 よりによってこんなときに…。  
点子 鉄平、本当に私と結婚する気あるの？  
鉄平 ああ、もつたるせえなあ、結婚結婚って…。  
点子 苦しいときだからこそ…。  
鉄平 そんなにしたきゃ竜介としろよ。  
点子 何それ、冗談よね。  
鉄平 あいつの気持ち、知らないわけじゃねえだろつ。  
点子 バカ!

点子、原稿をつかんで通路に去る。

鉄平、プリントを丸めてマックに投げつける。

続く